

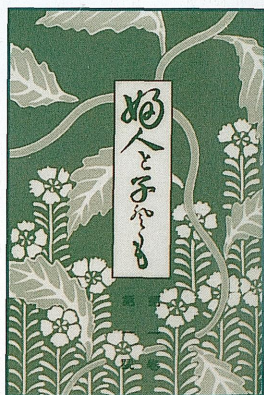
創刊100周年

# 幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

2001

3

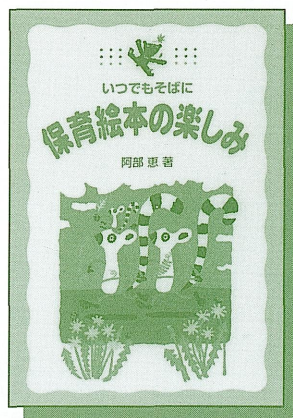


第一巻第一号(明治34年創刊号)表紙

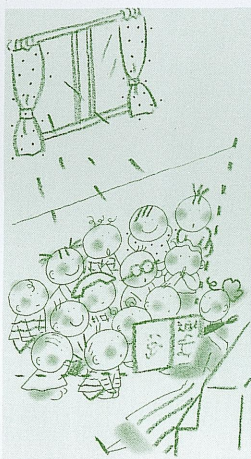
第100巻 第3号 日本幼稚園協会



保 育 絵 本 は ど 身 近 に あ っ て、	保 育 者 の 力 強 い 味 方 に な っ て く れ る	も の は あ り ま せ ん。	と こ ろ が 「 灯 台 も と 暗 し 」。	近 く に あ り す ぎ て、	そ の 素 晴 ら し さ に 気 付 か れ な い ま ま に	な っ て い る こ と が 多 い よ う で す。	保 育 絵 本 を 手 に し た ら	本 書 の 内 容 を	ち よ っ と だ け 意 識 し て み て く だ さ い。	保 育 の 幅 が ぐ ん と 広 が り ま す。	阿 部 恵
---	--	---------------------------------------	---	---------------------------------------	---	---	--	----------------------------	---	--	-------------



## 保育絵本で子どもが育つ 保育絵本でいきいき保育



保育絵本は、子どもたちの興味と関心をよびさまし、想像力を刺激する内容がぎゅっしりつまっています。その保育絵本の使い方をさまざまな実例を紹介しながらわかりやすく、日々の保育に生かせる手引書となるように編集しました。

**本文は6章で構成。  
保育絵本の魅力と生かし方が満載です。**

- 1章●いくつになっても懐かしい、絵本は人生の贈り物
- 2章●絵本は「読み聞かせ」より「語り伝え」
- 3章●もっと知ってほしい保育絵本
- 4章●保育絵本はなぜ大切か
- 5章●難しくない保育絵本の楽しみ方とコツ
- 6章●保育絵本がわかるQ&A

# いつでもそばに 保育絵本の楽しみ

阿部 恵・著

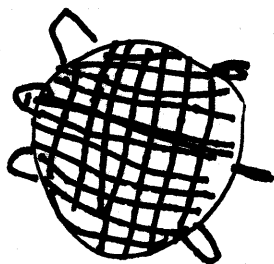
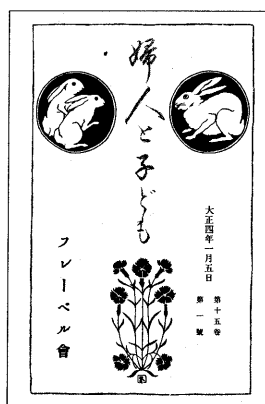
A5判/296頁/定価：本体1,300円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部  
(03)5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第100巻 第3号



# 幼 児 の 教 育 目 次

—— 第一〇〇巻 第三号 ——

© 2001  
日本幼稚園協会

創刊一〇〇巻を記念して 東基吉・くめのことなど

——「鳩ぽっぽ」から「口演童話」まで——……………森上 史朗……………(4)

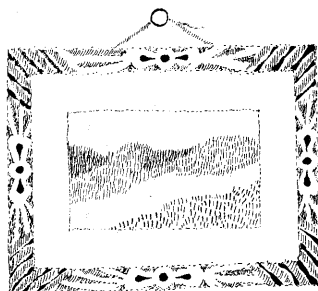
ヒヨコとのふれあいの中で……………都丸千寿子……………(13)

秋田県における

幼稚園・保育所の一元化施設をとりまく現状と課題……………安藤 節子……………(19)

ある日…………………………(28)

私が幼児教育を志した頃(16)……………津守 真……………(30)





子ども時代と私(23) 音痴・運動・夜尿症……………岸井 勇雄…(38)

耳をすまして 目をこらして(12)……………宮里 暁美…(44)

メディア文化黙示録―アニメの巻(二)……………山本 政人…(46)

日常生活における想像力と

サン＝テグジュペリ著『星の王子さま』をめぐって……………磯部 景子…(52)

遊びがかわるとき、遊びをみつけるとき……………吉岡 晶子…(59)

表紙絵／片柳 淳子

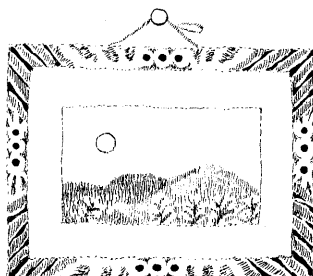
扉題字／津守 真

扉カット／第十五巻第一号表紙・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ「思い出のスケッチ」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・榎田 正子

編集部／仲 明子



創刊一〇〇巻を記念して

## 東基吉・くめのことなど

—「鳩ぼっぼ」から「口演童話」まで—

森上 史朗

### 新宮駅の歌碑の前に立つて

今から十数年前に私と新宮市の幼稚園との交流は始まった。当時はまだ国鉄という名称の汽車が走っていた頃のことである。汽車が名古屋を出てかなりの時間を走った頃左に紀伊長島あたりの海が見えてくる。それからまた、山やトンネルをいくつもこえ、

海が見えてきてしばらくすると新宮駅に着いた。新宮駅の駅前には東くめの胸像と彼女の作詞になる「鳩ぼっぼ」の歌碑が建っている。新宮は東くめそしてその夫、基吉の出生の地なのだ。私は保育史を少し研究しており、東夫妻のことも調べたことがあるので、その歌碑の前に立つて、殊さらに感慨深いものがあつた。



当時は東くめのことは名誉市民ということよく知られていたが、一九五八（昭和三三）年まではごく一部の人を除いて彼女のことを知る市民はきわめて少なかったということである。それがその年にNHKの人気番組「私の秘密」で「鳩ぽっぽ」をはじめ、「お正月」（もういくつ寝るとお正月）、「水鉄砲」（水をたくさん汲んできて、水でつぽうで遊びましょう）などの作詞者で、しかも、新宮市で育ったということが紹介され、一躍有名になったという。そして一九六二

（昭和三七）年には名誉市民に推され、駅前  
に歌碑が建立された。

このように、東くめのことはほとんどの市民によって知られるようになったのである

が、「鳩ぽっぽ」などの『幼稚園唱歌』を作ること  
を東くめと瀧廉太郎に依頼した張本人の東基吉につ  
いては、近親者とその周辺の人以外には全く知られて  
いない存在であった。私は毎年数回新宮市を訪れ  
ながら、教育関係者に基吉がわが国の教育改革、な  
かでも幼児教育の改革にどれほど大きな貢献をした  
かをできるだけ紹介するようになってきた。そのうち  
に基吉の業績も知られるようになり、地方の文化誌  
『熊野誌』は、一九九七（平成九）年に刊行された  
第四十三号において、東基吉・くめ特集号を組んで  
いる。

「鳩ぽっぽ」をめぐるいくつかのエピソード

『幼稚園唱歌』ができた由来については、基吉自身  
が『幼児の教育』に「婦人と子ども（幼児の教育の  
前身）創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況に就  
いて」（第五十巻第十一号）という文の中で記述し



ている。それによると、その頃はきわめて古典的な歌詞に古い雅楽の旋律をつけて歌わせていたので、子どもには全く歌詞が理解できないものであった。

そこで基吉は歌詞も曲も子どもらしく、子どもによくわかるものでなくてはならないと考えていたので、時々妻くめと相談して、簡単な童謡を作って附属幼稚園の職員会議に持ち出したが、何とかなんとか理屈をつけて採用されなかったという。ところが、その頃、音楽界の麒麟児と呼ばれていた瀧廉太郎が東の家に遊びに来て（瀧は東京音楽学校、今の東京芸大でくめの二年後輩であった）、基吉の話を聞いて、「幼稚園で歌わせる唱歌を作ろうじゃありませんか、奥さんが歌詞を作ってくれば自分が作曲するから」という話で、それがまとまって、『幼稚園唱歌』になったという。しかし、これも昔のままのものを墨守する傾向が強かった当時の附属幼稚園の保母には歓迎されなかったが、二葉幼稚園（東

京の保育園の草わけ）の野口幽香女史や女子高等師範学校の音楽教師であった吉田信太氏などは、まるで天来の福音のように喜んでくれたという。

その後『幼稚園唱歌』は次第に幼稚園に普及していったのであるが、「鳩ぽっぽ」の歌については文部省唱歌の「鳩ぽっぽ」だけが日本国中に広がってしまった、くめの作ったものはあまり知られなくなっていた。そのことについて近親の由比照子氏は自分の夫の母（義母）東くめから直接聞いた話として『熊野誌』の特集の「思い出すままに」の中で次のように語っている。

「鳩ぽっぽでくめが残念がっていた話があります。瀧さんとくめとで子供の歌を作ってから後に、文部省が尋常小学唱歌と云う本を出します。それに鳩の歌があるのですが、くめは申しました。『ぽっぽで始まると鳩ぽっぽだか汽車ポッポだかわかりやしない。私は初めから鳩ぽっぽというたい出しているんだい。

よ、それに喰べたらみんなで行けなんて、喰べ立ちする様なお行儀の悪いことを教えてないよ。喰べてもすぐに帰らずにぼっぽぼっぽと鳴いて遊べって、みんなと仲よくする様に教えているんだよ。文部省の歌が出た時、よっぽど文句を云おうと思ったけれど、私が騒ぐと誰か若い人が傷つくだろうし、その人の一生に影響すると気の毒だから我慢したんだよ」と。

現在は著作権が守られているが、昔は著作権どころか作者の名前さえ出さなかったので、誰の作かもわからなかった。「鳩ぽっぽ」が日本で最初の口語体での話しことばの子どもの歌であることも、くめがNHKの「私の秘密」に出演してはじめて日本中の人に、また新宮市の人にもわかったのである。

昨年は奇しくも『幼稚園唱歌』が作られてから丁度百年目に当たった。そこで新宮市ではそれを記念して、安田祥子、由紀さおり姉妹を招聘して、市民会

館で「童謡と唱歌の夕べ」を開催し、『幼稚園唱歌』のいくつかが披露された。その翌日、市の求めに応じて、私が「東基吉・くめ夫妻の生涯と業績」について記念講演をした。もう新宮市に基吉・くめ夫妻についての研究者が輩出していて、本来ならば、私の出る幕ではないと辞退したのであるが、東の活躍していた時代的背景も広く紹介して欲しいということとで引き受けたわけである。

#### 明治期における貴重な育児記録

一九〇四（明治三七）年に瀧廉太郎が亡くなり、くめは「瀧廉太郎君の一周忌に」（『婦人と子ども』第四卷第八号）を発表した後、唱歌を作ることは一切切めている。その理由は定かではないが、この頃、長男の貞一の育児に追われる忙しい毎日で、作歌どころではなかったということもあろうが、もう一つは瀧廉太郎という同志を亡くしたことも唱歌の

創作に一つの区切りをつけることになったのではないかと推察される。

それからは、『婦人と子ども』に貞一の育児日記ともいえる「貞一の日記」を第四卷第七号から二二回にわたって連載している。

この貞一の日記より以前に『婦人と子ども』にはいくつかの育児記録が掲載されている。たとえば無名氏による「或母の日記」（第一卷第五号より第二卷第四号まで六回連載）、印東おとなによる「小さき日誌」（第一卷第九号より第二卷第六号まで五回連載）、会員某女による「富士ちゃんの日記」（第三卷第二号より第三卷第四号まで三回連載）などである。これらはいずれも短い期間の断片的な記録であるのに対し、「貞一の日記」は、誕生から満三歳を迎えるまでの三年間の記録で、比較的長い期間にわたっての成長過程が克明に継続して記録されている。これには単にその日の出来事だけではなく、食

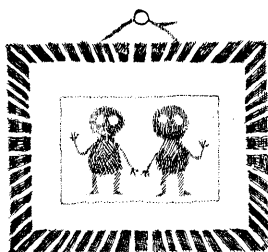
事の内容、健康状態、成長の様子、親のかかわりなどが正確に記録されている。

『婦人と子ども』の第六卷第四号には、基吉が「子どもの日記につきて」という一文を載せているが、そこには育児日記をつけることの重要性や記録の仕方などが記述されている。また、第六卷第五号には、東基吉著『新案・育児日記』（弘道館発行）の広告が載せられており、これらことから「貞一の日記」はくめと基吉の共同の仕事と考えてもよいのではないだろうか。児童文化研究者の山崎千恵子氏は、この日記は「明治期に書き残された最初の『子どもの日記』であり、それはとりもなおさず、従来の日本の子育てから、西洋の近代育児法への過渡期の精確な記録であり、〈日本児童史〉研究の視点から見れば、近代日本における『子育て』の貴重な資料ではないか」と高く評価している。



## 熊野の風土と東基吉の人となり

ここで、くめと瀧廉太郎に幼児のための唱歌を作ることを勧めたり、正しい保育の在り方を普及する目的で『婦人と子ども』（『幼児の教育』の前身）を創刊した東基吉についてもふれる必要があるであろう。彼の生い立ちや生涯の仕事については、東基吉自身が昭和三十三年に刊行した『皐月歌集』の中の「私の幼年時代と少年時代」及び長男の東貞一氏が



執筆している『熊野誌』第二五号（昭和五〇年発行）の中の「日本のフレーベル東基吉」という文などで詳しく知ることができる。

それによると基吉は

須川家に生まれ、立派な屋敷に住んでいたが、母親は基吉を出産すると間もなく六カ月で世を去り、継母に育てられるが、継母も五歳の時に亡くなっている。その直後、父、長兄も相ついで死去し、須川家は没落し、家屋敷や財産もすっかり人手にわたり、無一物になった。そこで基吉は七歳になったばかりで、東ことというお婆さんのところへ養子にやられた。この東家は貧窮洗うが如しという言葉がびつたりで、屋根は板片に石をのせてあるだけで、天井もなく雨が漏ると下から附け木を一枚押しこんで止めるという工合だった。基吉はこの東家で養母と二人で生活しながら小学校に通った。養母は彼が村役場の小使いにでもなってくればと望んでいたが、向学心にあふれ、だれも援助してくれるものはないという状況の中で、自力で道をきり開いていつていのである。そこまで彼の意欲をかきたてたものは何であつたかを知りたいと思い、基吉自身の著作や研

究者の文献を読んでみたが、十分に明らかにはできたとはいえない。

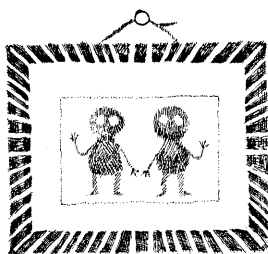
当時、新宮の地は紀伊半島の先端にあつて、名古屋からも大阪からもそこへ到達するのが困難をきわめる遠隔の地であつたにもかかわらず、先進的な文化が花開いていたようである。たとえば英語学校が設けられ、巡査や小学校の教師たちも競つて英語を学んでいたという記録がある。そうした文化的雰囲気、佐藤春夫（詩人）、西村伊作（文化学院創設者）、中上健次（作家）など、数々の文化人を輩出させることになったのかも知れない。

基吉は高等科二年生（今の小学校六年生）の頃から英語学校で学んでいるが、月謝が払えないので、毎日先生の家の水汲みをして、その賃を月謝にしたり、時々先生の代稽古をしに三重県まで出かけて小学校の先生に英語を教えてアルバイト代を稼いでいる。そうした苦境の中で、船で大阪に行く人に頼

んで、パーレーの万国史、クワッケンボスの米国史などの原著を取り寄せて読破している。

明治二十年熊野川が大氾濫し、川沿いの村役場の台帳が全部水浸しになつたので、二二年から台帳の整理がはじまり、基吉もその仕事について、かなりの収入を得たという。その金で明治二三年に和歌山師範学校へ入学、卒業後、東京高等師範学校入学、卒業後直ちに岩手県師範学校主事となり、一年を経て、東京女子高等師範に教授として招聘され、同附属幼稚園の批評掛（今で言う研究顧問）を兼ねた。『婦人と子ども』はこの時期に基吉によって創刊されたものである。

『婦人と子ども』創刊の経緯やその時の苦労話は前出の「婦人と子ども（幼児の教育の前身）創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて」に詳細に記されているので、それにゆずりたい。その中から一つ二つだけエピソードを紹介してみよう。一つは



『婦人と子ども』という誌名であるが、本来は保育専門の雑誌にしたかったのであるが、それだけでは売れないので書店が引き受けてくれない。そこで家庭でも読まれるようにと誌名が決まったという。その後、書店より解約申し出があり、基吉はそのため、自分が往訪記者になったり、広告取り、活版屋への使い走り、雑誌の包装や発送まで一人でやらなければならなかった。また、原稿料も十分にならないので、当時まだ早稲田の学生であった野口雨情氏など

にはビール一ダースを届けたこともあったという。

東基吉と

幼児教育との訣別

東基吉は幼児に即した唱歌の提唱、育児日

記の考案、『婦人と子ども』の編集のほかにも数えきれないほどの幼児教育への貢献を行っている。その一つをあげると当時の保育項目に位置づけられていた「談話」の改革である。当時は動物や植物などについての理科的知識を教えこむ「庶物話」と道徳的な教訓をストーリーに教えこむ「修身話」が中心であり、想像力をかきたてる童話は荒唐無稽のものとして斥けられていた。基吉は当時のそうした風潮に批判の目を向け、「談話」の改革や幼児が没入して耳を傾けるような童話の必要性を訴えた。そうすると、「どこにそんなお話があるのですか」と保母に詰問されたりしている。そこで、基吉は「やまとの翁」の名をもって古今東西の昔話やアンデルセンそのほか近代童話作家の童話を翻訳、翻案、再話してまとめている。それらのいくつかは『婦人と子ども』の初期の頃に掲載されているが、その後は家庭向けにと、『母のみやげ』（明治三八年、同文



館）、『子供の樂園』（明治四〇年、同文館）、『日曜とくほん』（明治四〇年、東京文陽堂）などの童話集を刊行している。これらのいわゆる口演童話のためのテキストの存在は知っていたが、なかなか入手できないでいた。最近フレーベル館の元編集長の河合隆一氏がすべてを見つけ出してくれたのでそれらに目を通すことができ、基吉の苦勞の跡を明らかにすることができたのである。

東基吉の幼児教育の改革の集大成は『幼稚園保育法』（明治三七年）であるが、この本はあまりにもよく知られているので特に説明の必要はないと思われる。

東基吉はあれほど幼児教育に情熱を傾け、大きな改革を行ってきたのであるが、一九〇八（明治四一）年に東京女子高等師範学校教授ならびに幼稚園批評掛の任をとかれ、宮崎県師範学校々長として赴任してからは、全く幼児教育にかかわる仕事や発言

がないのは実に不思議なことである。基吉のその後の著作物からは、そのことを知る手がかりは全く得られなかった。児童文化研究者の上笙一郎氏は「東基吉Ⅱその幼児教育における仕事」（『熊野誌』第四三号）の中で、東京女子高等師範学校教授兼幼稚園批評掛という位置を離れると、多分当時としては幼児教育との接点は全くなくなり、ジャーナリズムも彼の意見に重きを置かなくなったからではないかと推察している。そして、基吉が批評掛という仕事を続けていたなら、倉橋惣三の業績と重なるいくつかの仕事をやリ遂げたのではないかと述べているが、もしそうだとしたら、宮崎県師範学校々長への栄転は幼児教育にとつては、まことに残念なことであつたと言わなくてはならない。

（子どもと保育総合研究所）

# トモコとのふれあいの中で

都丸千寿子

本園は街中にありながらも、比較的自然には恵まれており、竹林や雑草園、クヌギなどを始めとした樹木も多く、大きな動物小屋にウサギやわとりをたくさん飼育している。子どもたちは今までもその環境の中できつといろいろな経験をして育っていたのだろう。しかし、すでにそこにある

なことを考え子どもたちに寄り添っていくと、今までは見えなかったことが見えてきたように思う。そこで、偶然に学級にやってきた小さな生き物、ヒヨコとの出会いやふれあいを通しての出来事から、その一端に触れてみたいと思う。

## 二羽のヒヨコ

自然に対して、今まで自分がどれ程の意識をもっていたのだろうか、自然とふれあう中で子どもたちの何がどのように育っているのだろうか、そのよう

二羽のヒヨコが四歳児の本学級にやってきたのは十月中旬のことである。ある催し物で希望者に

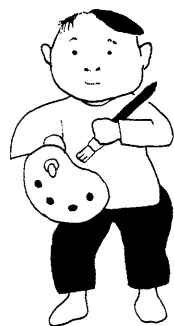
配っていたのをA児がもらい自宅に持ち帰ったのだが、数日飼ってみて自宅ではどうも飼いきれないと考えた母親とA児が「幼稚園で飼ってほしい」と言って連れてきた。とりあえず、「何とかなるかな」という気持ちで預かった。

登園してきた子どもたちは、小さいヒヨコを見て、「かわいい、先生、このヒヨコどうしたの？」と口々に言う。理由を説明するとともに、幼稚園の動物小屋にはすでに飼っているにわとりがいて、そこに一緒にするとこの小さいヒヨコはつかれてしまうかもしれないことを話すと、「じゃあ、黄組で飼おうよ」と言い始めた。子どもたちの気持ちが真剣であることを感じ、学級で飼うことにした。

子どもたちは次々にヒヨコを抱き、「かわいい」「ほわほわだねえ」と膝の上でヒヨコとのふれあいを楽しんでいた。中には握り締めるように持つ子もあり、「そんなに強く持ったらかわいそうで

しょ」などと声をかける子どもでできた。カップに餌や水を入れて食べさせながら、「たくさん食べて大きくなつてね」とヒヨコに声をかける子どもたちの表情は、とても穏やかで優しさにあふれていた。

B児が「ねえ、ヒヨコに名前を付けてあげようよ」と言い出した。「そうだね」と、学級の子どもたちがいろいろな名前を言い始めた。その中で『サトシ』と『コジロウ』という名前に人気が集まり、みんながその名前に賛成した。「大きい方がサトシで、小さい方がコジロウね」とB児が言い、ヒヨコの名前が決まった。



## 成長の様子への気付き

ヒヨコは数日のうちには産毛が生え変わり始め、白い羽が背中に見え始めた。大きさもあつと言う間に二倍、三倍になり、登園してきた子どもたちは「昨日より大きくなってる」「羽が生えてる」とその変化に驚いたり喜んだりしていた。餌もたくさん食べるようになり、今まで使っていたカップでは軽過ぎてすぐに倒してしまう。また、ヒヨコの時に入れておいた段ボールでは小さすぎて飛び出してしまふ。「先生、もつと大きな入れ物ない?」「もつと大きな餌入れないかなあ?」と気付く子がでてきた。そこで、物置から少し大きめの飼育カゴを探し、陶器の餌入れと水入れを買ってきた。子どもたちは「よかったね、ヒヨコちゃん」とまた嬉しそうな顔をした。

このヒヨコは学級の人気者になり、朝来ると、「先生、サトシたち出していい?」とカゴから出

し、餌をやったり抱いたりするようになった。今までは虫も触れなかったC児がコジロウをしつかり自分の手の中に抱き、「お散歩しようね」と園内を連れて歩き、時には腕や肩に乗せて頬をすり寄せる姿まで見られるようになった。肩から羽を羽ばたかせて舞い降りるコジロウの姿に「わあ、ヒヨコも飛ぶんだねえ」と感動して拍手する子どもたち。これは飼育小屋で飼っていたのでは分らなかった姿だろうと思う。

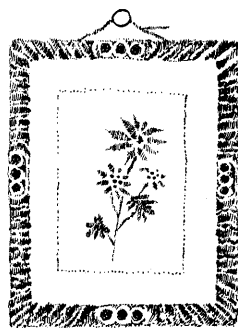
ある朝、登園してすぐにサトシたちの様子を見ていたD児が、「先生、サトシたちの頭が割れて黄色いものが出てる」と大きな声で叫んだ。多くの子どもたちが寄って来て「何これ?」と言い始めた。E児が「これって、にわたりの頭にある、赤いやつじゃないの?」と言うと、F児が「それって、とさかのことだよきつと」と言った。

「でも赤くないよ」「これから赤くなるんじゃないのかなあ」「とさかって赤くなる前は黄色いん

だ」などとサトシたちの変化の様子に一喜一憂している様子だった。その後も羽が大きくなってきたことや足が太くなってきたこと、爪も大きくなってひっかかれるとちよつと痛いことなど、サトシたちの大きくなる様子を間近で見、触つて、感じている姿が毎日のように見られた。今までも飼育小屋でヒヨコを飼っていたことがあるが、このような変化の様子に気付く子が果たしていたのかな。もしかして気付いていたのかもしれないが、網越しで違う世界の出来事のような状況だったのかなと思うと、子どもたちが、小さな生き物とふれあい、その中で様々な経験をして様々な思いを抱くことは、生き物と共に生活する中でこそ可能なのかもしれないと思うようになった。

### ヒヨコのお母さん

日々成長するサトシとコジロウ、その姿を毎日見つめているG児がいた。G児は、家庭内に問題



を抱え、多分本人もそれとなく感じているのだろう。時折寂しそうな表情を見せたり教師に異常なほど甘えてきたりすることがあった。A児たちと一緒に遊ぶこともあるが、ふと気付くと一人の世界で遊んでいる子だった。ほかの子がサトシたちと遊ぶより、友達と遊ぶことが楽しくて、サトシたちのことを忘れていても、G児だけは必ず「先生、餌がなくなってるよ」「カゴの中、汚れてるよ」「カゴが狭くてかわいそうだから出してあげようよ」と、ヒヨコを気遣い、遊ぶ時にもコジロウを膝に乗せてままごとをしたり、一緒に走り回ったり、抱いてかくれんぼをしたりする姿が見





に、サトシたちのこと、聞きたいの」と言う。なるほど、G児にとっては網の中のウサギより、せつかならサトシたちのことが知りたいのかと思ひ、「そうか、連れてこよう」とサトシを連れてきた。

獣医師を目の前にすると、G児は何を聞きたいのか分からないのかモジモジしていたが、獣医師に「お名前は？」と聞かれ、「サトシ」と答える。

「どのくらいの時から飼ってるの？」と聞かれ、

「このくらい」と両手をすばめて見せるG児。

「そう、ヒヨコから飼ってるんだ。男の子？ 女の子？」と聞かれ、「わかんないの」と言うのと、

獣医師はニワトリの絵を見せ、「これから大きくなると、このときが大きくなるからね。うんと

大きくなると男の子。でもね、ときかより足の方がよく分かるよ。ここに角みたいにおちんが出てきたら男の子なんだよ」と絵を指差して丁寧に説明してくれた。そして「ポケモンとかではアツと

言う間に大きくなっちゃうけど、本物の生き物ってゆっくりゆっくり大きくなるんだよね。これからも大事にしてあげてね」と言われ、G児は嬉しそうに「うん」と応え、サトシを抱いて保育室に戻って行った。

それからサトシとコジロウは子どもたちに抱かれ、手乗りヒヨコ（ニワトリに近いが子どもたちはヒヨコと主張する）の別名をもって共に生活している。時にペランダに落とす物をして「コラ、サトシだめじゃないか」と言われて追いかける。G児はサトシたちのお陰か、一時とは違った明るい表情で過ごしている。できればこのままできる限り子どもたちの近くで一緒に……と思う毎日である。

（群馬大学教育学部附属幼稚園）

# 秋田県における幼稚園・保育所の

## 一元化施設をとりまく現状と課題

安藤 節子

全国的に、乳幼児人口の減少が問題になっているが、秋田県においては、最も深刻な状態を呈している。

平成十一年の秋田県の出生率は、七・七（全国平均九・四）と最低記録を更新し、平成七年から五年連続で全国最下位となっている。

一人の女性が生涯に産む平均の子ども数（合計特殊出生率）は、一・四五で全国平均を上回っているのだが、婚姻率が全国で最下位であり、若い女性の年齢層が少ないことを示している。

秋田県の乳幼児人口は、平成十二年四月現在で、五万八千九百十三人であり、そのうち幼稚園、保育



所などの家庭外保育を受けている子どもの数は、三万四千三百五十二人で、全体の五十八・二パーセントである。

保育施設は、幼稚園百十五、認可保育所二百四十五、へき地保育所八十六であり、その中で定員百名を超える保育所は五十施設にとどまり、小規模型保育所が圧倒的に多い。

他に事業内保育所十六、集団保育をしている児童館が二十一、無認可保育所が二十七と、保育施設の小規模化と多様化が特徴であるといえる。

少子化による定員割れの保育所は、人口の過そ地域に多く見られるが、平成十二年現在、保育所の減少は認められていない。一方で幼稚園は、少子化の波を大きくかぶり、平成元年以降、廃園、休園する園が目立っている。

また、〇歳から五歳の乳幼児のうち、保育所、幼稚園などの集団保育施設に入所している子どもの数

は、〇歳児八百六十三人、（在宅児八百三十二人）、一歳児二千二百二十三人（在宅児七千二百五十七人）、二歳児三千四十人（在宅児六千六百二十三人）、三歳児七千六百二十六人（在宅児二千二百四十二人）、四歳児七千九百四十七人（在宅児千四百一人）、五歳児一万七千八百八十五人（在宅児百十五人）であり、家庭外の施設で保育を受けているものの割合を示すと、〇歳九・五パーセント、一歳二十二パーセント、二歳三十一パーセント、三歳七十七パーセント、四歳九十八パーセント、五歳九十九パーセントである。

秋田県は、秋田市など都市部の人口の集中している地域を徐くと、ほとんどの市町村で乳幼児施設は、定員割れを示し、このような現状の中で、幼稚園と保育所の統合、保育所間の統合などの動きが見られる。

そこで、現在秋田県内で進行中であり、これから



▲Ⅰ 幼児教育センター園舎平面図

も増加が予想される幼保一元化施設について、その実状を報告し、幼保一元化施設をとりまく問題点や課題を検討してみることとする。

### 幼保一元化施設設立の経緯

平成十年四月開設の、Ⅰ幼児教育センターは、地域にそれまであった二つの公立幼稚園と二つの公立保育園を統廃合したものである。一元化施設設立の理由としては、町の少子化と、財政上の経費軽減が

あげられる。また、平成元

年開設の〇幼稚園は、町内の二つの公立幼稚園を一つにして、三カ所にある公立保育所の中の一つの保育所に隣接させ、幼稚園と保育所を廊下でつなげている。

この二施設は、地域の少子

化に対応したものと考えてよい。

しかし、昭和四十四年開設のW幼児教育センターや、昭和五十一年開設のM保育所・M幼稚園（合築）、昭和五十三年開設のR幼稚園・R保育園（合築）は、少子化への対応というより、地域の保護者の要望、「幼稚園・保育所の区別のない保育を」という願いに答えるという形で行政が動いたと考えられる。この背景には、当時の秋田県の行政が、幼稚園と保育所の一元化を積極的に奨励していたことが指摘できる。

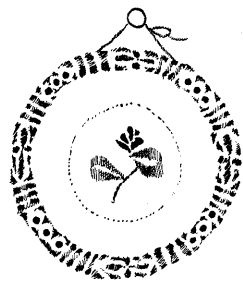
当時の秋田県知事は、一九七〇年代の「秋田県教育の新しい道」として、「生涯教育の構想」を打ち出し、その中で「幼児教育の振興」を位置づけている。「幼稚園教育を保育所の子どもへも」といった考えの下に、幼保一元化を進めようとした。これは、当時の県や地域行政、保護者が、幼稚園は「教育」、保育所は「保護」といった受けとめ方をして

いたことが推察される。

幼稚園も保育所も保育の内容は、その本質において変わるものではないはずであるにも

かわらず、幼稚園は教育、保育所は保護といった誤解がそのような状況を生じさせたと思われる。しかし現在では、幼保一元化施設は、少子化への対応として役立っているといえる。

以上のように、一元化施設の経緯は様々であるが、昭和四十年から五十年代の一元化施設開設の際には、それまでの保育を今までより重要なものとして、とらえ直し、幼児期の大切さを地域の保護者や行政が認識しようとした時期でもあったといえるのではないだろうか。



## 一元化施設の保育の実状

これらの一元化施設の保育の状況は、地域の実状に応じて違いがみられる。

例えば、保育料は五歳児全員無料という地域や、幼稚園在籍でも国の保育所保育料徴収基準に準じて徴収している地域もある。

保育時間は、午前七時三十分から午後六時までの所や、午前八時三十分から午後四時三十分まで、あるいは、午後一時三十分には、一部の子どもをのぞいて、四・五歳児のほとんどが降園するといった施設もある。

給食は、二歳未満は完全給食、三歳以上はおかず給食がほとんどである。午睡もある所としていない所がある。

登降園は、三歳以上は、全員施設側でバスによる送迎を行っている。

在園児の人数は、W施設幼稚園在籍二十七名、保育園在籍百七名、合計百三十四名で、三歳未満児は十五名、となっている。M施設は、三歳以上のみの在籍で、幼稚園三十二名、保育園三十五名である。

(平成十二年より幼稚園を廃止し、保育所として三歳未満児も受け入れている)。I施設は、幼稚園八十二名、保育園六十三名で、三歳未満児は十九名である。三歳未満の保育は高額になることや、秋田県内では、三世代家族が多いことから、母親が働いていても、祖父母が養育をすることにより、三歳未満児の入所は全体に少ない傾向がある。

### 行政・保護者の意識と家族形態

全国的に働く母親が増加している中で、秋田市などの都市部では、幼稚園への入園が減少し、保育所への入所を希望する親が多くなっているのだが、幼保一元化施設のある地域では、三世代家族が多く、

母親が外で働いていても家には祖父母が居るという家庭も多い。したがって降園時間が通常の保育所より早くても支障のない家庭がほとんどである。施設によっては、四歳になるとほとんどが幼稚園在籍となつて午後一時三十分以降園しているという。

幼稚園といっても、給食があることや、バスによる送迎も行われるのでその利便性が、保護者には歓迎されているようだ。また、幼稚園在籍であれば、保育料も低額で済むことから、経済的にも保護者の負担が少なく幼稚園を希望する親も多い。

昭和四十年から五十年にかけての、保護者の希望として、「小学校入学前に、是非、幼稚園教育を受けさせたい」というものとは幾分、意識の異なるものを感じる。

行政の側では、年々共働き家庭が多くなっていることや、幼稚園への入園希望者数が減少していることから、幼稚園の存在理由をつかめず、公立幼稚園を廃止しようと考えている地域も少なくないが、幼

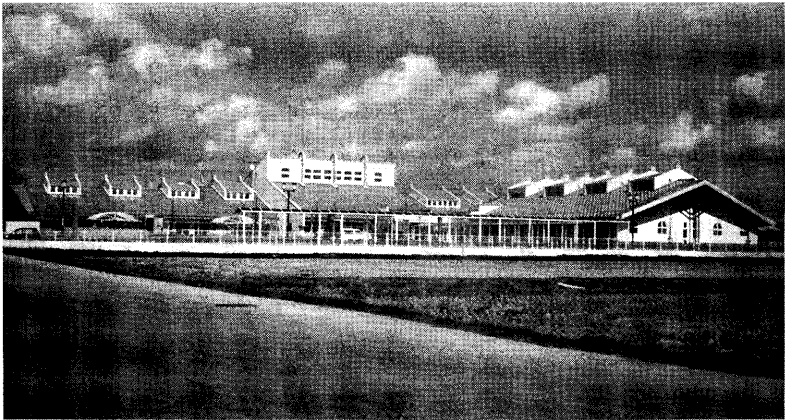
保一元化施設のある地域は、結果的に幼稚園を、一元化という形で存続させることになったといえる。

家族の形態としては、前述のように、秋田県は三世代家族も多いのだが、その有り様も変化してきている。かつては、若い母親は外で働き、祖父母は農業に従事しながら日昼子どもを養育していた。子どもの養育の主導は大半が祖父母にあり、母親は自分の思った子育てができずに悩むという姿も少なくなかった。大家族によって子育てが営まれるということとは、子育ての知恵が生かされ、育児ノイローゼや母親の孤立や子どもへの虐待などを防ぐことにもなっていたといえる。しかし、最近では家族の有り様も変化し、三世代同居でありながらお互いになるべく干渉せず別々の生活スタイルを持つという傾向が強くなっているという。日昼の養育を祖父母に託して気を使うより、保育施設へ入所させた方がわずらわしくなく安心できるという親も増えつつある

という。又祖父母の方も、農業の機械化などで時間に余裕ができたこともあって、外へ働きに出るケースも多くなってきたという状況であるという。このような事情から最近では、低年齢から保育施設への入所を希望する親が多くなってきた。

### 子どもの生活と親とのかかわり

降園後の子どもの生活や遊びは単純化され、ほとんどがテレビゲームやビデオ視聴、既製の遊具での一人遊びが多い。自然環境に恵まれていても、近所に同年齢の子どもがいないことから外で遊ぶことはほとんどない。これは一元化施設のある地域に限った現象ではないのだが、これまで地域に点在していた保育施設が一元化により一カ所になったことによって、子どもたちの登降園に時間がかかるようになり、これまで以上に、家庭や地域での遊びの時間が少なくなっていることは事実である。歩いて登園することによって、地域の自然環境に触れたり、地



▲Ⅰ 幼児教育センター園舎全景

域の人々の生活を目にするという機会も失われてしまっている。

また、長時間のバスによる登降園は、子どもへの心身の負担も大きく、保育施設での生活や遊びにも影響があると思われる。さらに親と子どもの日々のかかわりの質や量にも微妙な影を落としているように思われる。

親による毎日の保育施設への送迎は、保育施設での子どもの生活や遊びを知り理解を深め、家に帰ってからの話題にもつながる。その日の遊びの様子や友だちとの関係などを知っていることによって、親と子の話はずみコミュニケーションも豊かになる。特に家に帰ってから家事に忙しい母親にとって、保育施設への送迎の時間は、親子が共に過ごすことができる、短くも貴重な時間である。さらに子育ての悩みや心配事も、毎日の送迎時に担任保育者に相談したり、母親同士が情報交換し合ったりと、早期の解決が期待できる。送迎バスがあることは、便

利で安全ではあるのだが、親子のコミュニケーションのきっかけを乏しくしたり、親同士の関係の形成の機会を失わせているように思える。

このような状況の中で、M施設では、「子どもを親と地域に還す日」を考えているという。W施設では、連絡帳による親とのやり取りを工夫したり、施設からの「便り」のあり方の再検討をしている。又I施設では、各町内ごとに保育者が訪れて、小規模の親の会の開催を始めている。又夏休みや冬休みを子どものために長く取ることも可能な限りすすめている施設もある。

このように、長時間、長期間保育施設で生活する子どもたちを、意識的に家庭や地域に還すことによって、親子関係や地域の人々との関係を再構築させるよい機会となり得るのではないだろうか。

### 保育の内容・職員の状況

一元化施設の運営や状況は施設により異なること

は、保育の内容においても同じである。

保育内容を、保育所保育指針を参考にしている施設と、幼稚園教育要領を基本としている所とがあり、又その両方を取り入れて保育を展開している所もある。

職員についても、幼稚園採用と保育所採用とが別になっている施設や、幼保の別なく採用され、研究会や研修会への参加も平等に行われている施設もある。

一元化施設のプラス面としては、幼稚園・保育所の両方の動向がわかることや、新しい教育・保育の相互の情報交換が可能になることがあげられると思う。

また、〇歳から五歳までの幅広い年齢層の発達をみることができることは、保育者の子ども理解を深め、保育内容も長期の発達を見通した内容となっていくことが考えられる。

しかし一方では、研究や研修の時間が慢性的に不

足していることが指摘される。

一体的運営をしていくためには、保育者の共通理解や意志統一が重要であるのだが、保育所サイドの勤務ローテーションが組み込まれていて、全員揃う時間が持ちにくいという問題がある。さらに、指導機関が二分化されているために、事務関係の仕事が複雑になっている。特に施設長は二つの機関の会議への出席で余裕がない忙しさである。

少子化の著しい秋田県では、財政上の経費軽減という側面から、これらの一元化施設への関心は高まりつつある。しかし、入所している乳幼児にとつて、幼保一元化がどのような影響を及ぼしているかについての、十分な検討がなされないままに一元化が進められたという経緯もあって、今後はそれらについての慎重な検討を行っていく必要があると思われる。

(聖園学園短期大学<sup>みそ</sup>)

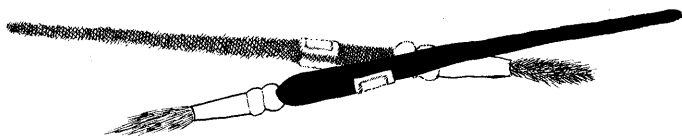




撮影・平野 清

# ある日



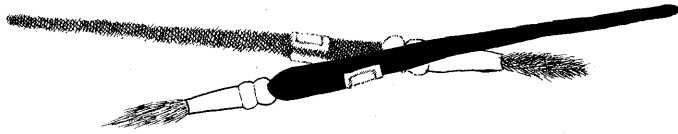


# 私が幼児教育を志した頃(16)

津守 真

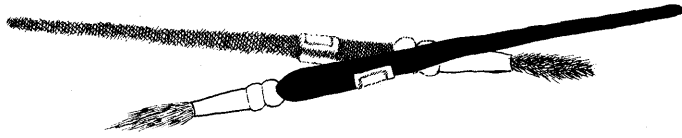
## カントリー風ボーチのジギア家

私がミネアポリスで泊めて頂いた六番目の家、ジギア氏は屋根葺きの職人だった。カナダ系のフランス人とアメリカインディアンの混血で、蚊とんぼのように痩せていて、正直な好人物だった。一緒に車でドライブすると、あの家は私が葺いたのだ、あの屋根はこういう特徴が、と屋根の話が聞けるのも楽しかった。毎朝、ブリキの手提げ弁当箱をぶらさげ、仕事着を来てガタガタのダットサンに乗って出かける。ジギア家は市の北部の勤労者階級の地域にあり、カウボーイの映画に出てくるようなカント



リー風のポーチのついた家に住んでいた。ポーチからじかに居間に入るようになっていた。私が学校から帰ると、夫人はいつも街路に面した揺椅子を揺らしながら戸外を見ていた。子どもたちは結婚して、夫婦二人の家なので、大勢子どもがいたコレット家から引越してきた私には、静かで寂しいくらいだった。米国の生活にも慣れた私は、風通しの良いポーチの揺り椅子に腰掛けて夏の午後をひとり静かに味わいながら、日本のこと、これからの自分の学問のことなど考える時間をもてたのは有り難かった。涼しい風がエルムの並木の間を通る。青い空と大地が快い。ときどきジギア夫人に話しかけられて考えが中断される。

ジギア夫妻には息子がふたりいて、ふたりとも結婚していた。末の息子は大学一年のときに、ハイスクールの女の子と正式に結婚したが、そのことを母親が知ったのは何か月もたった後だった。ジギア夫人が少しためらいながら私にそのことを話してくれたとき、私がひどくびっくりしたからだろうか、その後の話をしてくれた。ジギア夫人は息子をすぐに退学させて働かせた。そうしたら早くも一年くらいで離婚した。息子の妻の母親がとても世話焼きで、毎日あれを買ったか、これを買ったか、今日のおかずは何かと言って指図した。若い夫婦がニューヨークにいたときも、一日に何度もミネアポリスの母親から電話がかかり、夕飯のメニューまで指図されたので息子が独立心を害して、母親と夫とどちらの言うことを聞くのかと言って別れたのだとい

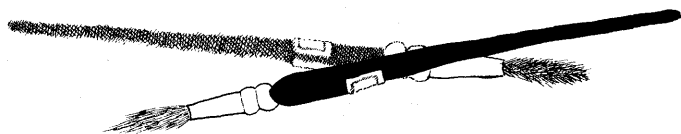


う。でも互いにとっても愛しあっているからいまに仲直りするだろうとジギア夫人は付け加えた。八歳の子どもがいる。

### ジギア夫妻

ジギア氏は夕方になると、どこかでウイスキーを飲んで帰って来た。食卓につくと、ジギア夫人にもっと食べろ、もっと食べろと言われて、これ以上食べられるものかと言いながら食欲以上に口に押し込まれる。夫人は色白で、造花をつけたつばの広い帽子をいつもかぶっていた。ジギア氏はゴルフ狂で、土曜、日曜にはかならず朝七時から夜八時までゴルフに出かける。飾り棚には大小のゴルフ賞杯をいくつも飾っている。台所にぶらさげであるカレンダーには細かな字でゴルフの日取りと場所が一、二ヵ月先まで書き込んである。

ジギア夫人は三十年来自分はゴルフやめだと私に淡々と話した。土曜の晩は、二人別々にトランプの会に行く。自動車も、ジギア氏のはペンキがはげたり凹んでいたが、夫人のは大型のシボレーで、自動開閉の最新式の窓だった。いつもガレージの中に収まっていて、旦那には使わせなかった。こう言っても夫婦仲が悪いのではない。ある日、例によって旦那が夕飯に帰ってこなかった。私は夫人と先に食べ、夫人が隣家におしゃべりに行っている間にジギア氏が帰ってきた。「ママはどこに行っ

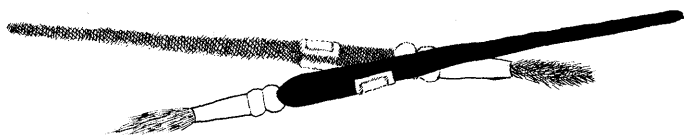


た？」と尋ね、その声を聞いて夫人が戻ってきた。「今夜は残業で、防火扉が閉まって出られなくて遅くなったんだ」とジギア氏は言ったが、三、四間先から酒のにおいがぶんぶんするので、弁解だということがすぐ分かる。ジギア氏は何かにつけて夫人に叱られる、愛すべき存在である。ジギア氏はカトリックで、夫人はプロテスタントであるが、夫人に言わせると、ジギア氏は何十年もゴルフには行けど、教会に行かない。夫人は休日も一人ぼっちである。

ジギア夫人は子ども好きだった。隣家の四歳のサンドラと五歳の男の子が始終台所口に来て、ジギア夫人に本を読んでもらったり、小さな物のやりとりをして遊んでいた。私もよくそれに加わって、ままごとをして遊んだ。お茶大の附属幼稚園でままごとをするときと同じだった。この家を引っ越すときにはサンドラに会えなくなるのが寂しかった。

### 大統領選挙

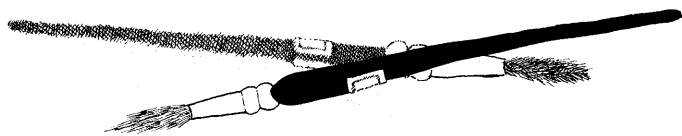
一九五二年はアメリカの大統領選挙の年だった。レパブリカン（共和党）からアイゼンハウアーが、デモクラート（民主党）からステイブンソンが候補者に立っていた。新聞もテレビも毎日のように大統領選挙の報道に沸いた。当時のアメリカは冷戦の最中で、コミニズムに対してヒステリー状況にあった。エドガー・フーバーは



マツカーシーと連携して激しくコミユニズム非難をし、レパブリックを応援した。私はフーバーの激しい演説に戦慄を覚えた。

当時の日本は焼け跡が普通の風景で、焼け出された人々の家はトタン屋根のバラック住宅だった。貧しかったけれども、異国で考えると優しく、美しく、皆が平和を望んでいるように見えた。原爆は必要悪であるという大統領選の議論は、普通の人が悲惨な死に方をしたのを知っている日本人には到底受け入れることはできなかった。ミネソタ州は伝統的にデモクラートの地盤だったから、フーバーのデモクラート攻撃には快く思わない人が多く、私を泊めて下さった家庭では、例外なしに冷静に考える温かい人達だったことは私にとって生涯の幸이었다。

七月十日の夕方はものすごい雷雨と稲妻だった。ミネソタの夏は急に天候が変わり、晴れていた青空に一点の黒雲が見えたと思うと忽ちに雷鳴と稲妻と大雨に襲われる。私はジギア家のポーチで嵐を見ながらアメリカと日本のことを考えた。日本で考えると朝鮮戦争は遠い地の出来事に思えたが、アメリカで考えるとひどく切迫感を感じた。原爆がいまにも使われるのではないかと異国にあつて日本の家族を案じた。いま思うと考え過ぎと思うのだが、当時の日本人には当然の感情だった。その頃は指で数えるほどしかいなかった私のまわりの日本人留学生たちは、多かれ少なかれ同様の感想をもっていたことも確かである。私はつましく貧乏で可哀想な日本人と、金持ち



で慎みのないアメリカ人とを対照して考えた。

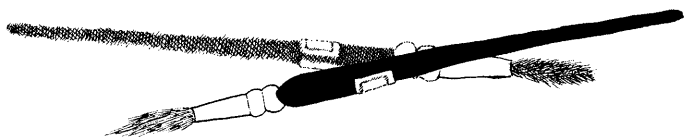
## 家庭

私がミネアポリスを去って丁度一年目に、ホワイト夫人からの手紙で、ジギア氏が急死されたことを知った。屋根にかけた梯子から落ちて頭を打ち、そのまま病院に運ばれて意識を回復することなく死んだとのことだった。木曜日に亡くなり、金曜日には埋葬された。ジギア夫人はあのがらんとした家の中でどうやって過ごしておられるだろうかとは心配した。

それから数年後に知ったことだが、その後ジギア夫人は記憶を喪失し、病院に入っただけで間もなく亡くなったとのことである。

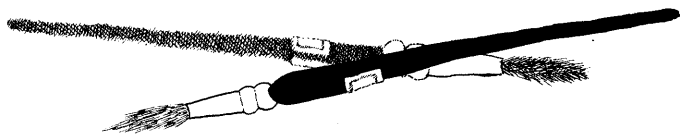
ジギア家は私に深い印象を残した。いわゆるアメリカの典型的な家庭ではない。家族の団欒も少なく、家族の間に何となく食い違いを残し、人々から称賛される家庭ではない。ジギア夫人はいつも物足りない思いで揺り椅子に腰掛けて遠く外を眺めていた。お酒を飲んで夕食に間に合わずに帰ってくるジギア氏はいつも夫人に引け目を感じて、小さくなって家に入って来た。そのご主人を亡くしたとき、ジギア夫人は存在の支えを失ってしまった。人目に立たない所で、最も深い愛情で結ばれていたのではないかと私は今になってしばしば考える。





\*

この原稿を書いていたとき、米国の国立デイスアビリティセンターの養護学校グロバーリンステイチュートのディレクターであるクリスティン・パウエルスキー女士が愛育養護学校に訪ねて来られた。一日子どもたちと親しく交わり、母親の懇談会にも参加して夕方暗くなるまで話して行かれた。二〇〇〇年十一月の大統領選挙でレパブリカンとデモクラートが殆ど同数でフロリダ州の票の手作業数え直しの最中で、これをどう思うかと尋ねられた。私は一九五二年の大統領選挙のときのアメリカを思い出し、話題はその頃からの米国の教育の変遷に移った。女史は一九七〇年代のコンビア大学の卒業で、その頃はまだ進歩主義教育の名残があつて、教授は実習生の隣に一緒に座つて実践について討論した。その後、アメリカの教育は急激に変化して学力中心になり、教師は自由を失い、教授も壇上から学生に講義するだけになったことを残念に思つておられた。私がOME Pで何度か一緒になった、OME Pの大先輩でコンビア大学のゴルドン・クロプフ教授の名を出すと、その人が隣に座つていた自分の指導教官だと言われ、私どもは共通の知人を発見して、アメリカの進歩主義教育とその後について懐かしく語り合つた。この二、三年に、アメリカの教育は再び変化しつつあるという。親が中心になつてチャータースクールという多様な学校を作る運



動があるという。私は日本語に保育という語があることを語り、教育から保育が失われたことが現代の学校のさまざまな問題を生んでいるという私の考えを話した。

あの頃世界を席卷したマッカーシズムは、何年も経たないで凋落した。エドガー・フーバーはFBI長官を長くつとめたが盗聴事件などで世間から批判されて孤独な死を遂げたのを私が知ったのはごく最近のことである。あのときあんなに激しく人々を巻き込んだ人々は歴史の舞台から去ったが、世界には常に新たな問題が起っている。歴史は繰り返すが、しかし、前のいかなる時代とも違う新たな展開をするのが歴史であらう。私も幼児保育にたずさわる者が、子どもの側に立って日々を過ごすことはいつの時代にも世界平和の土台を作っているのだと思う。

## 音痴・運痴・夜尿症

岸井 勇雄

昭和五十七年の四月、十八年間勤めた新潟から東京へ戻り、文部省のお手伝いを始めた時のことである。久しぶりに生まれ育った新宿の幼な友達、四谷第五小学校の同期会に出て盛り上がり、カラオケも一巡した頃、「あのキシイチャンがねえ……」という感に耐えたような女の人の声があった。

「あのキシイチャンって、どんなイメージだったの」と訊くと、「音痴で運痴だった」というではないか。それが、さっきからの話によると、テニスク

ラブの会長を務め、スキーは二級、フィギュアスケートも一級を目指し、カラオケもなかなかのもので、信じられない、という。もともと、「下手なくせに一生懸命楽しんでいるあの人を会長にすれば、誰も劣等感を持たずに済む」という変な理由でやられた会長だし、フィギュアの一級は初級の次なのだから知れている。

それでまざまざと思い出したのだが、本当に私は小学校（当時は国民学校）時代、音痴で運痴だっ

た。

### おまえはダメだと言われて

私は昭和七（一九三二）年二月、ダンゴ三兄弟のまん中に生まれた。相当なワルだった。隣の「花園万頭」の工場を庭から覗き、「おまんじゅうくれー。こんなにたくさんあるくせに、ケチー」と叫んだところ、その日の午後、和服姿のきれいな小母さんが、「これを坊ちゃん方に」といつて重箱を持ってみえた。両親が「何のご挨拶だろう？」と言つて不思議そうにしているとき、「ヤッター」と叫んでバレーて叱られた。「何ということ。まるで食べさせてないみたい。恥を知らない、恥を！」

兄弟を含め、近所のチビガキと群れをなして遊んだ。ところがある時、ボスだった小学生に、「おまえはルールを知らないからダメだ」と言われて、その遊びからはずされた。子どもながらに尊敬していたボスから言われて、深く反省した。そう言われ

ば、デタラメに遊びに加わってばかりいた。

生来、根が真面目だったのか、それ以来、それをよく知っている、正しくできるという確信のない遊びには入れなくなってしまった。これは致命的だった。子どもはデタラメに遊びながら、「おまえ、違うぞ」「わかつてるよ」と言いつつ必死で人のすることを盗んで身につけていくのである。

歌もそうである。音程をはずしながらいろいろな声を出しているうちに正しい音を出すことができるようになるのであって、正しい音が出ないからと言つて歌わなければ音痴のままである。人間の知識・技能は遺伝しないから、生まれてからどれだけやったか、ということの結果が出る。そのためには先ずデタラメが許されなければならない。

もう一つ、それに倅さす教育を受けた。それは、落ち着きのない私を矯正するために、近所でも厳しいことで評判の書道塾へ入れられたことである。満四歳の時から正座して正しく毛筆を持ち、一点一画

筆法を教えられ、少しでも崩れると竹の鞭がとんだ。おかげで五歳の時に「八絃一字」と大書した掛軸が、泰東書道院の全国展で新聞社賞を取り、それから毎年各種の書道展に入賞した。

学校へ上がるとすでに評判で、常に貼り出される名誉を独占したのだが、長くは続かなかった。三年生の二学期には友達と並び、三学期には友達二人が貼り出され、自分のはなかった。それ以来二度と貼り出されることはなかった。それをうつろに眺めていると別の子がやってきて、「このごろ岸井の出ないな」と言うではないか。思わず負け惜しみを言ったイヤな自分を思い出すたび自己嫌悪になる。「ただ、あの字曲がついているし、勢いがいいよ」——第一線で通用しなくなると評論家になるほかないのであった。

早期に、型にはまった正しさを強制することがどんな結果をもたらすかを、こうして体験した私が解放されたのは成人してからであった。大学院生時

代、極度のノイローゼに陥った私に、医師は自律神経失調症と診断して言った。「遊んだことがないんじゃない？ 遊ばなきゃダメだよ。それも、ちゃんと遊ぼうなどと考えたら遊びじゃなくなる。いい加減に遊ぶようにすることだね」。

いのちがけだったから医師の言う通りにした。ポランティアの資金稼ぎにダンスパーティーを開いても、ステップを知らないからと一度も踊らなかった壁の土の私が、意を決して申し込んだ相手の壁の花もステップを知らなかったので、二人で組んで音楽にワンテンポ遅れながらスイングしたら結構楽しかった。友達が「岸井、踊れるじゃないか」「あれでダンスと言えるかよ」「確かに体育ダンスでも徳育ダンスでもない。でもチイクダンスにはなっていた」というオチがついた。

こうして、人に誘われるままに、気楽にやるようになって中高年を迎えた。先刻のクラス会で、小学校時代運動会や学芸会の花形だった連中が、スポー

ツも歌もやらないようなので、理由をきくと、衰えが目立って面白くないのだという。要するに過去の栄光が邪魔をしているのだ。それに反して、音痴と運痴というゼロから出発している私には邪魔するものがない。やればやるだけほんの少しずつでも進歩するのが楽しい。できる人と比べたら問題にならないが、幼児と同じで、少しでもなりたい自分に近づくとしたらやめられない。これからの国民的課題であるコンピュータリテラシーや英会話も、時間の許すかぎりチャレンジする意欲だけは失わないでおこう。

### 平和と戦争と夜尿症

それにしても幸せな子ども時代だった。幼児期から低学年にかけて、毎日のように新宿駅へ列車を見に行った。いちばんのお目当ては、長い貨物列車を引っ張って蒸気機関車が通ることだった。今でもなぜか、D51449というプレートが目焼き付き

いている。たまにしか来ない自動車を見に行つて、待つ心、集中力、観察力が養われたという津守真先生の思い出と重なる。

さらに副産物があった。切り離された貨車に、二人、三人の入れ換え作業のおじさんが、もたれかけて体重をあずけると、やがて少しずつ動き出し、押して歩き出し、走り出し、とび乗って転轍器を越えて別の線路に待つてゐる列車にガチャーンと連結するのを飽かず眺めた。六〇キロの間でも、じっと耐えて力を加えつづけることによって何トンもの貨車を走らせることができるのだ。後年学校でエネルギ―不滅（保存）の法則を習ったとき、実感をもって理解し、学習の喜びを味わうことができたのも、この幼少時体験のおかげだった。永久に続くような、こま切れでない自由な時間があつた。

小学校四年の時太平洋戦争が始まり、昭和十九年、都立四中（戦後の学制改革で都立戸山高校に。同校の大先輩に津守真先生、後輩に『五体不満足』の乙

武洋匡君がいる）へ進学した。一学年上からは勤労動員に、下からは集団疎開が行われたので、私たちの学年だけが東京に残った。

昭和二十年五月二十四日未明の夜間大空襲で私は家も母も失った。地獄の一夜が明け、焼け跡を探し回り、やっと横たわる無惨な姿の母を発見した。私は思わず駆けよって「お母さん、ほくだ、わかるか」と声をかけた。母は火ぶくれの臉から涙を流し、焼けただれた唇を動かして、「……ありがとうございます」と言った。「こんな目に遭って何があるがたいんだ」となじる私に、母は、炎の中でおまえを見失って以来、どうか私を身代わりにしてあの子を助けてくださいと祈りつづけた……それもかなわぬままといういまわのきわに、おまえの元気な声か、と途切れ途切れに言った。やああって、「お父さんは」とたずねるので、「やけどはしたけど、軽いかから心配ない」と答えると、母は大粒の涙をこぼして、「もうおまえ、大丈夫だね」と言い残して、

やがて息絶えた。

五年に及ぶ焼跡生活。栄養失調、進駐軍の靴磨き、いろいろなあったが、最後まで自分を粗末にできなかったのは、自分は自分だけのいのちではない、この中に母が生きている、という心の支えだった。私が人の愛を、甘えにも似て信じ切っているところがあるのも、こうした原体験の故かも知れない。

生前の母は、つまらないことでくよくよしたり、ぐずぐず言ったりすることがなかった。「理想は大きく、志は高く」といった具合で、くだらないことを訴えても、とり合おうとはしなかった。



母に口でほめられた記憶は、一度しかない。それは、小学校で大げんかをして、向うずねをいやというほど腫らして帰った時だった。母は、相手が三人で、自分より強いヤツだということ、売られたけんかであること、机や椅子の投げ合いという大乱闘であったことなどを確かめたあと、傷口にお神酒を吹きつけて言った。「よくやった。それでこそ男子だよ」。

ある日、台所で誰かと話をしている母の声が聞こえた。「ほんとにあの子はしょうがない子だ……」と聞こえた私は衝撃を受けた。母に嫌われた、母に見放された、と思ったのだ。私は号泣した。母はやって来て、泣きじゃくる私を大きな目で見すえて言った。

「人に嫌われるようなことをしたら、嫌われて当たりまえです。いさぎよくしなさい」

きびしく叱られたことが、もう一度だけある。

「おまえは、人の誤ちや欠点をしつこく言いたて

て、人を恥しめて喜ぶところがある。これはよくない悲しい性です。気をつけなさいよ」

私は気づいていなかった。へりくつを言うなどいって父に叱られてはいたが、自分はいっぱし正義の味方のつもりで攻撃的に人を追及するところがあったのだ。「恥しめて」という言葉は、あとにもさきにも耳にしたことがない。私は一生これを自戒しなければならぬと肝に銘じている。母に見抜かれた通り、悲しい性が、確かにある。

母を失って間もなく国は敗れ、小学生の弟も疎開先から焼け跡へ帰り、男ばかりのホームレス同様の生活が始まった。その頃から寝小便に悩まされた。中学生にもなつてである。何年続いただろう。とにかく人にも言えない暗い秘密だったが、確か四歳下の弟と、治ったのが同時だったというのが救いであつた。

(昭和女子大学)



# 目をこらして (12)



「そうかって分かったことがあったんです」Kちゃんのお母さんが話し始めた。

「帰り道に、Kが、落ちている葉っぱを拾ってぐしゃぐしゃとやって、ほらお母さんいい匂いだよ嗅いでごらん！ って言ったんです。変なことするなあ、って思っていたんですよ。それがこの間『あんず』（時々発行している学級通信）を読んで、そうだったんだって分かったんですよ。」

\*

私の幼稚園の近くに都立林試の森公園がある。そこは、かつて林業試験場だっただけに数々の樹が生い茂り豊かな自然に包まれることができ、私たちは、第二園庭のような気楽さでよく出かけて遊んでいる。時にはゲストを招き一緒に出かけることもある。ゲストの一人のプロナチュラリストと森を探検していた時のことだ。

楠の木の下で、彼は言った。「この葉っぱをこうやってぐしゃぐしゃやって、嗅いでごらん！」

子どもたちは、不思議そうな顔で葉っぱをもんでいた。

それを鼻の近くに持つていくと……、





# 耳をすまして

「あ、匂いをする！」という響きの声が次々にあがった。楠の葉は、スーッとした匂いがした。

次に、ノビル（野草）の生えている所で、「これも嗅いでごらん」と言われ嗅いでみる。「これ、みそ汁で飲んだことある」そう、それは完全にネギの匂いだった。

こうして鮮やかな匂い体験をした子どもたちは、いろいろな葉の匂いを嗅ぐようになった。楠のほどの鮮やかな匂いではなくても、どの葉もかすかな匂いがある。そのかすかな匂いを楽しむ子どもたちだった。

\*

分かったこと、面白かったこと、興味をもったこと、それを何回でもやってみるのが子ども。

Kちゃんは、自分が嗅いだあの匂いをお母さんにもかかせたいと思ったのだろう。子どもの行動の意味を一緒に分かっ  
て、一緒に楽しんでいたら、本当にいいな、とKちゃんのお母さんと話していて思った。

今回は、「鼻をすます」のお話でした。

絵と文 宮里暁美（目黒区立ふどう幼稚園）



木のやにいと、かんじる、かんじる。  
光・音・命・美・そいて... かみり...

## のびるの葉



極細ねぎと

いうかんじ。

いわゆる草です。

でも、そのにおいは、完

全に、ねぎ!!

食べられます。

## くねきの葉



スーッとほ  
ににおい。

木についている緑の葉

でも、下に落ちた茶色

の葉とも、同じように、

いいにおいがある。

# メディア文化黙示録

## ― アニメの巻(二) ―

山本 政人

自己陶酔をコンセプトとするアニメのルーツは少女漫画である。主人公の女の子に複数の美少年が好意を寄せて、女の子は葛藤に陥るというストーリーは、昔から少女漫画の王道である。それが最近ではアニメにも見られるようになった。これはアニメの視聴者に女性が多いことにもよるだろうが、男もまたそういうストーリーを好むように

なったためであろう。そして少年からいい年をした中年男までがそうなった直接の原因はゲームである。

いわゆる「ギャルゲー」、「恋愛育成シミュレーションゲーム」は、プレイヤーが主人公の男の子となり、複数の女の子と交際をし、最終的にはそのなかの一人の女の子と結ばれるという何ともい

いろいろなゲームである。プレイヤーは一度結ばれたら別の女の子と結ばれることを目標にゲームを繰り返すのも特徴で、プレイヤーの熱中度が高く、激しくのめり込む者も出てくる。このあたりが虚構と現実の区別がつかなくなっているようにも見えるのだが、一種のファンタジーのような気もする。ゲームに登場する女の子たちはいわば「妖精」である。妖精はゲームの画面を飛び出し、ときにはフィギュアになり、ときにはキーホルダーやストラップとなって男たちのそばにいる。想像するにあまり気持ちのいい光景ではないが、かつて子どもたちが「ピーターパン」を夢見たのとあまり変わりはないのではあるまいか。この夢見る乙女ならぬ夢見る男たちは「大きなお友達」と呼ばれている。

「僕たちはガンダムで戦争や政治を学んだ」。これはあるアニメ評論の

同人誌で見つけた言葉である。この言葉は衝撃的であると同時に、奥深いものであると思う。今や国民の多くが戦争を経験していない人たちであり、戦争を「学ぶ」のは歴史の本か、さもないければ疑似体験によってである。ただし、ここでの戦争とは、ときにニュースで報じられる銃弾が飛び交う戦闘のことではなく、何らかの理由によって集団間で紛争が生じ、そのために多くの血が流され、終わってみると空しさだけが残るという一連の経過のことである。ガンダムシリーズは常に戦争を舞台としてきたが、それらには共通して描かれていることがあった。たとえば、戦争は政治の道具であるという哲学である。戦争は権力者の野望や反権力集団のテロから始まる。そこには正



義などなく、あるのは個人レベルの感情である。

主人公とそのライバルという図式はあるが、主人公が「正義の味方」というわけではなく、どちらにも大義名分があり、それぞれが恋をしたり、仲間との友情を確かめたりする。アニメは戦闘とその合間に生じる恋や友情、そして戦争の裏で蠢く政治を並行させて描いていく。

ガンダムシリーズのもう一つの特徴。それは登場する女性が強いことである。戦士として登場する女性はもちろん、科学者も母親も少女も、みなそれぞれに強い女性ばかりである。これも製作者の哲学なのだと思う。シリーズの一つに、主人公の敵側が母系社会の実現を議論する組織であるという設定が出てくる。これは冗談半分でそういう設定にしたのではなく、男性中心で行き詰まった社会を変革するための方法として、真面目に考えられたものなのではないかと思う。しか

しこの母系社会の実現を目指した人たちも、結局は男の権力者に利用されていたに過ぎなかったということが明らかになる。これこそガンダムの政治哲学である。高邁な理想も優れた能力も、そして醜い欲望までも、政治（男）は利用し、決して人々に幸福をもたらさない。

ガンダムを見ていて、「大きな友達」がまず考えるのは、「あんな強い女性がいたらいいなあ」ということだと思うが、おそらくそれだけではない。「モビルスーツはカッコいいけど、戦争ってやだなあ」とか「政治家ってきたねえなあ」とか、「科学の進歩っていいことなの」とか、「人類って存在する意味あるの」といった問いまで出てくるかもしれない。出てくるに違いない。何せあの複雑難解なストーリーについていけるのだから、アニメを見た後、相当突っ込んだことを考えるに違いない。そもそもアニメ自体がそういう問

いを投げかけているのだから。あるシリーズで登場人物が次のような独白をする場面があった。

「人類にとって文明の発展は無意味だった。文明の発展は俺のように戦うことでしか生きていることを実感できない人間を生み出した」。よくあるセリフだが、衝撃的である。その後、実際に人を傷つけた少年がこれと似たようなことを述べているのは、単なる偶然だろうか。「ガンダムで戦争や政治を学んだ」というのは、決して誇張ではなく、真実の吐露だと思う。それがいいか悪いかというのとは意味がなく、問題があるとしたら、歴史や政治というものをどのように教えるかということだと思う。

ガンダムシリーズは初め「自立」や「成長」をテーマとしていたと見られていた

が、その後、人類批判、文明批判が前面に出てきて、ファンが離れてい

くことにつながった。多くのファンがアニメに求めているのは、人類や文明に対する批判などではなく、やはり個人の成長や個人人間の愛情の物語なのだろうか。

そういう路線で数年前に大ヒットしたのが「新世紀エヴァンゲリオン」で、このアニメについてはインターネットなどで論じ尽くされていて、今更論じるのはあまり気が進まない。しかし注目すべきは、アニメそのものより、百家争鳴ともいえるほど論評が盛んだったということであり、この「エヴァンゲリオン現象」は何だったのかについて考えてみたい。数年前、エヴァンゲリオン関連のホームページはとにかく多かった。それらの多くは、作品紹介、作品の感想や批評、そして意



見交換の掲示板を設けたものだった。インターネットの拡大とともにサイトが増えていったのだが、当時あたかもエヴァンゲリオンがインターネットを普及させたかのような観があり、案外これは的外れな推測ではないと思っている。エヴァを見て、その感想を誰かに伝えたい。疑問に思ったことを聞きたい。一般の視聴者が知らない情報を手に入れたいなど、さまざまな動機でインターネットにアクセスした者が一体どれくらいいたのだろうか。今日、国が力を入れてインターネットを普及させようとしているが、「大きなお友達」向けのアニメでも作れば、その効果は計り知れない。もっとも「大きなお友達」はすでにインターネットは使っていて、それもどちらかというと自分でホームページを作ったりするパワーユーザーだから、「大きなお友達」が増えることがインターネットの拡大にとっては望ましい。

「エヴァンゲリオン現象」の原因として大きかったのは、インターネットの普及である。インターネットがなかったら、あんなに話題にならなかったのではないかと思う。エヴァンゲリオン以前にも、テレビ放映の最終回が尻切れとんぼで、ちゃんとしたのは劇場版アニメとかOVAとかで出るというアニメはあったが、エヴァのように物議を醸したものはなかった。ファンはインターネット上で勝手に最終回の予想をしたり、続編を作ったりして、大いに盛り上がっていたが、現実の世の中はというと、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件の衝撃から未だ覚めやらず、何かほかに熱中するものを求めているようなところもあった。エヴァについてメディアが取り上げ、「社会現象」としたのは、そのような背景もあったのではあるまいか。すなわち「エヴァンゲリオン現象」はアニメそのものによって起きたわけではなく、一

つにはインターネットの普及、一つには暗い世相という外的要因によって起きたのではないかというのが私見である。

エヴァは確かによくできたアニメではあった。しかしキャラクターやストーリーをめぐって話が盛り上がったのはインターネットという媒体があったからこそだった。アニメ自体は人類の存亡をかけて少年少女が戦うというよくある話で、さまざまに論評されるが、大ヒットとなった本当の理由はよくわからない。そして論評は次第にアニメの細部に及び、死海文書とか使徒といった宗教的素材や、精神汚染とか魂のサルベージといった似非心理学的概念の解説や解釈へと矮小化していった。よくできてはいたが、実力以上の評価を受けたというべきか。あるいはインターネットがもたらした珍現象というべきだろうか。

一般に社会が不安定で流動的であるとき、ブームは起きるのではないかと思われる。ガンダムの哲学に従えば、それも政治的に利用されており、ブームに隠れて実は社会をひっくり返すような事態が進行しているということになる。アニメについていえば、ブームは作品の出来不出来とはあまり関係なく起きるのかもしれない。

そういえば、文部省がマンガを日本の文化として位置づけた。次はアニメである。「ジャパニメーション」と呼ばれ、世界に誇る日本の文化である。今は半分冗談だが、いずれ真面目にそういわれる日がくるに違いない。その日のために、これからできるだけ多くのアニメを見ておこうと思う。

(学習院大学)





# 日常生活における想像力と

サン＝テグジュペリ著

## 『星の王子さま』をめぐって

磯部 景子

おとなが子どもと生活するときに、子どもが、今、もっていることは、何かしらと思いつくんだり、一つのことからについて、いくつかの方向から考えてみるなど、おとなの想像力の大切さを感じる。

\*

幼稚園実習を出発点として、子どもたちのいるところで、子どもや保育について学びはじめた頃、私に

とっては、あまりにも不思議な光景に、たびたび出会った。ずいぶん昔のことなのに、時折、それらの場面を思い出す。いくつか例をあげてみたい。

お茶の水女子大学附属幼稚園で、はじめて教育実習をしたとき、私は、三歳児のクラスで実習することになった。

ある日、一人の男の子が、両手を飛行機の翼のように広げて椅子の上に立って、「せんせい、エンジンか

けて」と言った。先生は、子どもの後に立ち、燃料を入れて、エンジンをかける。その間、先生は子どもに何か語りかけているが、私には聞こえない。そのうち、飛行機は「ブーン」とうなり声をあげはじめ。飛行機は保育室を飛び立ち、園庭を横切り、「山の上」へ（園庭の向こうのしげみを越えた高台にある、もう一つの園庭で、通称「山の上」というていた）消えていった。

私は、この場面に会った時、子どもが飛行機になりきって、飛び立っていったことにも驚いたが、もつとびつくりしたのは、先生も子どもも、ごく普通のこととしてふるまっていることだった。あたりには、賑やかではないが、ある種の活気が感じられたし、ある雰囲気がただよっていたことが印象ぶかい。

私の日常生活とは、あまりにもかけ離れていると思った。

次の例は、お茶の水女子大学に大学院ができて間もない頃、研究室の先生や四・五名の院生と、年間をと

おして、五歳児のクラスへ通っていた時のものである。

その一つは、物語の一場面に出くわしたような例である。

園庭で、五歳児のクラスのK子がひとり、藤でできた直径五十センチくらいの輪を片手に持って、向こうから走ってきた。K子は、ふと立ち止まり、輪を、両手で顔の前にかざす。

「かがみよ、かがみよいっておくれ。せかいでいちばんうつくしいのは、だれっ」

と言いおわるや、K子は、また、藤の輪を片手に走り去った。

物語の人物になりきった、K子のいきいきとした様子が、今でも印象に残っている。一瞬ではあったが、『白雪姫』のせかいが感じられた。



二つ目は、五歳児の保育室で、“福引き”の遊びが、盛りあがっていた場面である。

保育室の一つのコーナーに、福引きの景品引き換え所ができている。机の上に箱積み木を重ね、中央に窓口がある。景品引き換え所から少し離れたところで、子どもたちがくじを引いていて、賑わっている。くじを引いては、景品を受け取りに行く。くじも、景品も、景品引き換え所も、子どもたちが作ったものである。

子どもたちが入れ替わり立ち替わり、景品引き換え所の窓口に向かう。窓口の奥にはY子がいて、景品をわたしている。しばらくして、景品がなくなる。Y子はおもてに出てきて、箱積み木で窓口を閉じる。

「よるです」

と、まわりにいる子どもたちに告げる。

Y子は、景品引き換え所を離れて、紙をとりに行く。別のコーナーで机に向かつて、マジックペンで大きく「おやすみ」と書いて、もどってくる。閉じた窓

口に「おやすみ」の紙をはる。

子どもたちは、景品引き換え所をそのままにして、園庭へ出て行く。保育室は静かになり、園庭で次の活動がはじまる。

子どもたちが満足感を味わって、次の活動に移っていったことに、そこに居合わせた私も満ち足りた気分になった。

“福引き”の遊びに満足して、次の活動へと移る、その展開のみごとさと、不思議な光景は忘れられない。

次の例は、二歳三カ月の私の姪のT子が、祖父母の家にあずけられた日のできごとである。T子は、両親といっしょに、祖父母の家ですごしたことはあったが、両親のいないところで、一人でいるのははじめてであった。

私は帰省していて、久しぶりにT子に会う。

T子は、何か落ち着かない様子で、家の中をあちらこちらと歩きまわる。T子の祖母がタオルで作った熊のぬいぐるみを、ちょっと抱きしめて、間もなく手放

す。深さ二十センチくらいの、子どもが一人だけ入れる大きさのダンボールの箱に入ってすわるが、すぐでてくる。二階への階段をみつけて、のぼりはじめる。二階で、直径二十三センチくらいのビニールボールを見つける。

Ｔ子の後について歩いていた私に、「バレーボールしよう。わたし、コズエよ」と言い、「あんた○○になって」と命令口調で言う。Ｔ子は、「ハイッ」と大きい声をはりあげて、ボールを私に向かって投げる。私は、ボールをうけとめて、「ハイッ」と言って打ち返す。

「アタック・ナンバーワン」だな、と私は思うが、「アタック・ナンバーワン」がどのようなテレビドラマなのか、コズエ以外にどういう人物が登場しているのか、私は知らない。ボールが飛んでくるたびに、私は、「ハイッ」と言って、ボールを打ち返す。

Ｔ子は、床すれすれに手をさしのべて、張り切った様子でボールを打ち上げたり、打つふりをする。お互

いに打ちあげたボールは、相手の手元には届かないで、とんでもない方向に飛んだりする。

間もなくＴ子は、「わたし、Ｔ子ちゃん」と言って、バレーボールをやめる。

また、家の中を歩きまわる。やがて、絵本『きかんしゃやえもん』をみつけてきて、「よんで」と言う。足をなげだしてすわり、本をひざの上におく。

私は、Ｔ子の変わり身のはやさに、とまどってしまった。

以上述べた四つの例は、子どもたちとの生活になれていない私にも、受けとめることのできたものである。

子どもは、想像力をフル回転して生きている。現実の時間や空間をこえて、現実のせかいを、自由にいきさして生きていることを実感した。

\*

さて、二〇〇〇年三月のある日のこと、テレビの

ニュースで、「今年は、サンIIテグジュペリの生誕一〇〇年にあたること」、「サンIIテグジュペリ著『星の王子さま』が、オリジナル版の挿絵にもとずいて出版されたこと」を報じていた。

『星の王子さま』を、岩波少年文庫や愛蔵版で読んだことがあるが、いちばん印象に残っているのは、飛行士が、小さな星からきた王子さまに頼まれて、さまざまなヒツジをかいだが、どのヒツジも王子さまの気にいらなかったこと、そこで、飛行士が、ヒツジのかわりに、「三つの穴のある箱」をかい、王子さまにみせると、王子さまが、箱の中に、自分のほしいヒツジをみて満足するくだりである。

はじめて『星の王子さま』を読んで以来、私は、「箱」の中にヒツジをみることでできる想像力にあこがれ、目にはみえないものを感じられるようでありたいと願いつづけている。

オリジナル版で、久しぶりに『星の王子さま』を読んだ。

『星の王子さま』は、「レオン・ウェルトに」の献辞にはじまるが、献辞はこの物語の序文になっている。

著者は序文で、この本を友人レオン・ウェルトにさげざる理由をいくつか述べたあとに、おとなは、だれも、はじめは子どもだった。（しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。）そこで、わたしは、わたしの献辞を、こう書きあらためる。

「子どもだったころのレオン・ウェルトに」（注1）と結んでいる。

『星の王子さま』は、著者自身による挿絵が随所に描かれている、おのおの、短い二十七章からなる小さな作品である。

一章では、著者は、絵かきになることをやめて、飛行士になったわけを述べている。二章は、前述した飛行士と王子さまが出会う場面だが、その場面は、私の想像をはるかにこえた、次の様な極限状況である。

飛行士は、人の住んでいるところから千マイルもはなれた、だれもない砂漠で、一週間の飲み水がある

かないか、生きるか死ぬかの状況で、ひとりで、飛行機を修理しようとしている。はじめての日の晩、砂地で眠る。夜があける。王子さまの小さな声がして、目をさます。

『星の王子さま』の物語は、このような極限状況を背景とした幻想のせかいである。

三章からは、王子さまが飛行士に語ったことから、飛行士が王子さまとの思い出として、述べていく。王子さまは、飛行士に出会うまでに、ふるさとの小さな星をあとにして、さまざまな星をめぐって地球にやってくる。最初にヘビに会う。ヘビはなぞめいたことを言う。花に会い、キツネと出会う。キツネはへ仲よくなる～ことについて、ふしぎなことを語る。

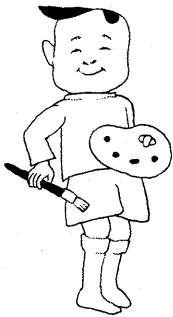
仲よくなると、お日さまにあたったような気もちになるし、足音も音楽をきいているような気もちになるという。わかれる時、キツネは王子さまに、おみやげとして秘密をおくりものにする——心でみなくては、ものごとはよく見えないこと、かんじんなことは目には

見えないことなど——。

二十四章、飛行機が不時着して八日目、王子さまものがかわいて、飛行士と二人で砂漠の中で井戸をさがし歩く。出会ったばかりの頃とは異なり、二人のやりとりは、ぴったり呼吸があう。やがて別れの時がきて、王子さまは、飛行士におくりもの——しみじみとうれしいこと——をしてふるさとの星に帰る。

あとがきでは、星が一つ空に輝き、果てしない砂漠が描かれていて、次の文章に続く。

……前略。王子さまが、この地球の上にながたを見て、それからまた、すがたを消したのは、ここなのです。……中略……もし、このところを、お通りになるようでしたら、おねがいですから、おいそぎにならないでください。そして、この星が、ちようど、あな



たの頭の上にくるときを、おまちください。後略

……。 (注2)

『星の王子さま』は、現実の時間や空間の枠をこえた不思議なせかいであった。読みおえて、あらためて思ったことは、感じることや想像力についてである。

おとなにとっても、子どもにとっても、日常生活が想像力に満ちた、活気のある日々でありたい。子どもたちの生活の一瞬一瞬が、想像力にあふれていて、子どもが、現実のせかいともう一つのせかいを自由にゆききして、子ども時代を存分に生きることができるようにと願っている。

『星の王子さま』の訳者内藤濯氏は、愛蔵版の訳者あとがきで、次のように述べている。

著者サン・テグジュペリは、思いきり子どもの時代に親しんだ経験があり、子ども時代との自然なつながりを絶えず念頭において、それを新鮮なのちの糧とした人であった (注3)。

#### 注

1『星の王子さま』オリジナル版 サン・テグジュペリ作

内藤 濯訳 岩波書店 二〇〇〇年 九頁

2 同右 一三五頁

3『星の王子さま』 岩波の愛蔵版1 サン・テグジュペリ作

内藤 濯訳 岩波書店 一九七六年 一三六頁

#### 参考文献

辻邦生・北杜夫「対話『星の王子さま』とぼくたち」『海』

臨時増刊号「子どもの宇宙」第十四卷第十三号 中央公論社

昭和五十七年

特集 サン・テグジュペリ 生誕一〇〇年記念特集『ユリイ

カ』第三十二卷第十号 青土社 二〇〇〇年七月号

# 遊びがかわるとき、 遊びをみつけるとき

吉岡 晶子

先日、教育実習期間中に、実習生が保育している場面を、担任を少しひいた立場で見る機会があった。渦中にいないと、見えてくるものや気になることも違ってきていろいろ考えさせられた。

見ていたのは三歳児の自分が担任しているクラス。その時まで、ままごとやレールをつなげた電車ごっこ、基地ごっこ、砂場や制作などいつもの同じメンバーが集まって遊んでいた。なのに、その時はなんだ

か部屋の中にいる人は少なくなり、ままごとの家も誰もいなくなつて、ままごと道具が散らばっていた。積み木を組み立てた基地はもぬけのから。こどもたちも金魚を見たり絵本を手にとったり先生のあとをついて行ったりしている。また、さっきまで部屋の中にいたメンバーもいつのまにやら園庭にいたりする。隣りの三歳児のクラスを見てみると同じような状況になつていて「遊びのあと」という感じがする。時計をみると



十時二十分頃。なるほど、この頃が朝からの遊びがほぼ終わってしまった時なのか、次になにして遊ぼうかまだ決まっていなさまよひの時なのかと思つたのである。この後どうなるのだろうと心配しつつ、日頃「先生、○○ちようだい」「先生、この本読んで」など材料を求められたり頼まれたり、「お山に行こう」と誘われたり、「先生」「先生」と呼ばれて忙しくなつて、部屋の中も雑然として物が散らばってしまうのはこの時かとあらためて思つた。

数日後、年長児数名が「先生、ガムテープ貸して」とやつてきた（私の部屋が近かつたからと思われる）。この日は雨が降つていたので、室内でバスケットをすることにしたとのこと。そのためにダンボールで作つたゴールを高い所につけたいらしい。「どこにつけるの？」と聞くと、廊下に行き、「ここ」と壁の高い所を指した。「ここにガムテープをつけると壁がはがれちゃうからはかの所をさがしてみたら？」と言うと、

「どこ？ 遊戲室とか？」と言いながら移動して行く。この日も実習生がいて気持ちに余裕があつたので、ここはひとつ付き合つてみようと思ひ、バスケットゴールをつける場所を一緒にさがしに行くことにした。遊戲室に行つて見ると、雨の日だけあつてにぎわつており、バスケットをやるような余裕のスペースはない。廊下に出て行きキョロキョロあたりを見回している。隅っこに引つ掛けられる所を見つけた彼等は「先生、掛けて」と言うので掛けてみる。でもそのまわりはガラスなので「いい場所だけどガラスにぶつかっちゃうね」と言うと、それは良くわかつたようで「うん」と頷きながらすわりこんでしまった。「どこかないかな」などと言つてゐるので、いろいろみんなでやりとりした後で、「こんなお天気の日にはほかの遊びを考えてみたら？」と言うと「ない」「どんなこと？」などぶつぶつ言つてゐる。でも、これ！ といふのがなかなか思ひ付かない。「たとえばね、ままこ

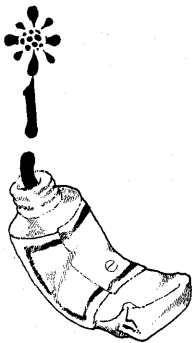
ととか、お店屋さんとか……」などやりそうもないことを提案してみた。そのうち「車を作ることにした」と宣言。「それはいい!」と賛成すると、バスケットのメンバーは保育室にもどって行つた。その後どうなったかを担任に聞いたところ、なかなか良い車が出来上がり、彼等より前から車を作つて遊んでいたメンバーと合流し、コースを走らせて楽しんだとのこと、良かったと思つたのである。

いつもよりゆったりとかかわり付き合うことが出来たこの時も、一遊びしたあとの時間帯。最後は意外な方向に展開したが、みんなふんざりをつけて次の遊びへと移つていった。今回、さがしたり、試したりを一緒に体験してみても、こどもたちはいつも結構苦労しているんだなあと感心し、また、私がいなかったらどう展開していったのだろうかとも思つた。そしてどのようにして自分達で遊びを見つけたり切り替えたりしているのだろうか、また、試したり工夫したりして遊び

の実現に向かつて行くのだろうか、遊びのはじまりや変わり目はどうなっているのだろうかもつと知りたいと思つた。この時はたまたまその過程に付き合うことが出来たが、すわりこんでいたりじつとしていたりなど動きがとまっていると、経過として見られずに「何もすることがないのかしら」と思つたり、うろろろしているのを見掛けると「うろろろしている」「走り回っている」と、プラスには受け止められなかったことが多々ある。でもこどもたちはなんとかしようと努力していたのかもしれないと反省してしまつた。

こどもたちの試行錯誤がいつもうまくいくとは思えない。友達と一緒に気持ちを保ちながら右往左往するのはなかなかむずかしい。

「やーめた!」とか「いちやんぺ!」と分散し



てしまったり、探しているという事で時をすごしてしまふこともあるだろう。うまくいかないことも糧にはなると思うが、何度も繰り返してその体験を積み重ねてしまふと前向きに考える意欲が持ちにくくなってしまうのではないだろうか。遊びと遊びの間の混沌とした時。何もしていないように見える時も、次へのステップで、自分が持つている知識や力を駆使して考えている時かもしれない。どういう状況にあるのかよく見極めないといけないが、この時をもっと大事にして混沌が無駄にならないようにしたいと思った。みのがしてしまつて不発に終わらせてしまつたことが何度もあったことだろう。混沌が助走になつてステップアップできる力をつけて欲しいと思う。それには、三歳児を担任している今、何を意識し大事にしていったらよいのだろうか……と思った。

その数日後のことである。やはり一遊びした十時十五分頃。それまでブロックで武器を作り、室内と園庭

で遊んでいたO夫、Y夫、F夫のうちのO夫が突然、以前作つた仮面（穴が二つあいたメガネのようなもの）をつけて登場。「先生、スーパー仮面のマント作つて」と頼まれた。すぐに欲しいのだろうか、紙を背中につけてヒラヒラさせればよいかと思ひ、「カレンダーにリボンをつけたのでいいかな」と言う。「いいよ、いいよ」の返事。すぐに作つて「これでどう？」と渡すと「これでいい」と身に付けて外に駆け出して行つた。この様子を見ていたのだろう、T夫は新聞の広告紙を持ってきて「先生、つけて」と言うので、背中にテープで貼り付け、「出来た！」とボンと背中を押すと、それで満足なのか走つて行つた。クラスで一番幼いM夫は、床に落ちていた紙を拾つて来て「これ」と差し出すので、背中につけてあげた。慎重派のF夫は、しばらく様子を見てから「スーパー仮面欲しい」と言うので急いで作つた。F夫は仮面に色をぬつて「かっこいい？」と聞いたりしてうれしそうに

している。S夫は「羽(マントのこと)つけて」と広告紙を持って来る。仮面を作りたい人、マントを作りたい人と、次々にリクエストがあつて大忙しになった。

てんやわんやの時間がすぎて園庭に出てみると、みんなうれしそうにマントをヒラヒラさせて走っている。

その中には、いつもマイペースで一人で遊んでいることの多いK夫もいて、仮面もマントも無しでニコニコ笑っていた。その様子を見て、K夫にとつてはこのようになにげなくいつものまにか大勢の中に入る方が無理がなく、友達と遊ぶ楽しさやかかわる楽しさに繋がっていくのではと嬉しく思った。思い切り遊んだ後お弁当の時間になり、みんな満足げにすなりと片付けてお弁当へと移ることが出来た。

スーパ―仮面軍団のきっかけになつたのはO夫の仮面だった。三歳児はちよつとしたことがきっかけで遊びが変わったり遊びを見つけたりするし、ふと目についたものに興味を持ったり刺激を受けたりしてやって

みようとする。この時は、自分の目的のために紙を見つけて来たり拾ったりして材料を調達している。また、色を塗ったり先生に頼んだりと、自分なりに行動に移してもいる。K夫も自分なりの参加の仕方をしていく。これが大事なのだと思つた。行動に移したことがうまくいって良かった楽しかったという体験の積み重ねが意欲に繋がるのだらう。この日のような出来事があった時、「すぐ真似をして」とか「なんでもかんでも欲しがって」などと思つたこともあるが、むしろその気持ちを生かしていくことのほうが先々に繋がると深く反省した。広告紙のマントに気付かせてもらつた。

一遊びしたあとのまださだまっていない時、三歳児はまだまだ「先生」「先生」と頼つて来る。なんとかしよう、何かしようという気持ちの表れだらう。忙しい忙しいとあせらずに、次へのきっかけ、とつかかりとして大事にしていこう。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# 編集後記

十二月のある日、私は観察のためにある幼稚園の保健室にいました。

絵本を見ている私の前に一人の女の子が近づいてきて、あやとりで作った“かわ”を見せました。その子は“かわ”の隙間から私を覗いて、私としばらく見つめ合いました。そして、もう一度“かわ”を作り直し、今度は私の額にぴったりとそれを押し付けました。

その目が“どうしたの、ここ？”とたずねていることが、私にもやっとなかりました。私は額に絆創膏を貼っていたのです。“はっ”として私は、「やけどをしたの」と答えました。

すると、その子はじっと私をみつめたまま、「私もね、前、つり輪から落ちてけがをしたこと、あるよ」と一気に言いました。その子の口から、すでに用意されていたように、言葉が飛び出しました。

言い終わると、入り口に走って行き、上履きを持って戻って来ました。そして、“A子ちゃん、別のことして遊ぼう”と誘いかけ、あつと言う間に二人で保健室から出て行ってしまいました。

ひとり残された私は、その子の変わり身の速さに驚いていました。そして、あの子は、私の額を一目見たときから、自分も同じ所にけがをしたことがあることを伝えたくて、私に少しずつ近寄って来たのだ、とそのときになってやっとわかりました。

(A)

## 幼児の教育

第一〇〇巻 第三号

(二〇〇一年三月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十三年三月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二丁目

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三三三三三九五六六二一三(営業)

振替 〇〇一九〇二二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

お待たせしました!!  
文部省の指導要録作成協力者会議のメンバーによる解説書の決定版です!

# 幼稚園幼児指導要録・解説と記入の実際

最新刊

平成12年3月に改訂された「幼稚園  
幼児指導要録」の解説と具体的な記  
入の仕方を1冊の本にまとめました。  
ていねいで分かりやすい解説、今回  
から導入された満3歳入園の子ども  
から5歳児までの豊富な記入例を掲  
載しました。「要録」記入でお悩み  
の方に最適の本です。



## 〈内容構成〉

- 第1章 指導要録の意義
- 第2章 指導要録の解説と記入の実際
- 第3章 指導要録の取扱い
- 第4章 指導に関する記録の記入例

A5判・248頁

定価：本体1,500円＋税

柴崎正行 (東京家政大学教授) 編

執筆 安部真知子  
(香川県高松市立檀紙幼稚園長)

岡上直子  
(東京都教育庁指導部主任指導主事)

片岡真弓  
(東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園教諭)

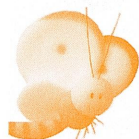
柴崎正行

田中雅道  
(京都市・光明幼稚園長)

松村和子  
(東京都・鷺谷さくら幼稚園副園長)

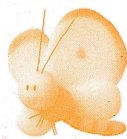
キンダーブックの  
**フレーベル館**





# たくさんの夢と感動が生まれる保育絵本

絵本からたくさんのおどろきや話し合いが生まれるように編集しています。  
幼児の発達や保育のねらいに合わせてお選びください。



## 総合生活絵本

季節、生活、お話、歌のページなど、月々の  
保育活動に合わせて構成されています。

### キンダーブック①

定価350円 (本体333円)

対象年齢 1②③④5

豊かな情操を育む年少児向け  
総合生活絵本。



### キンダーブック②

定価400円 (本体381円)

対象年齢 12③④5

感動する心や好奇心を  
引き出す年中・年少児向け  
総合生活絵本。



### キンダーブック③

定価410円 (本体390円)

対象年齢 123④⑤

自然や社会観察を通して、  
実体験への活動を生む年長・  
年中児向け総合生活絵本。



### がくしゅうおおぞら

定価420円 (本体400円)

対象年齢 1234⑤

ことば、文字、数量などの  
基礎を学び、考える力がつく  
年長児向け総合学習絵本。



## 科学絵本

身近な自然を、リアルイラストレーションと  
迫力ある写真で深く掘り下げ、その奥奥を  
感動的に伝えます。

### しぜん-キンダーブック

定価460円 (本体438円)

対象年齢 123④⑤

自然に親しみながら科学する心が  
育つ年長・年中児向け科学絵本。



## お話絵本

幼児の気持ちをひきつけ、バラエティーに富んだ  
楽しいお話を毎月お届けします。

### ころころえほん

定価350円 (本体333円)

対象年齢 1②③④5

遊びや楽しい会話が生まれる  
年少児向けスキップ絵本。



### キンダーメルヘン

定価350円 (本体333円)

対象年齢 12③④5

さまざまな絵本と出会える  
年中・年少児向けお話絵本。



### キンダーおはなしえほん

定価370円 (本体352円)

対象年齢 123④⑤

“おもいやり”をテーマに年長・  
年中児の心を育てるお話絵本。



### おはなしえほんベストセレクション

定価350円 (本体333円)

対象年齢 123④⑤

年長・年中児向けロングセラー  
“おはなしえほん”傑作集。



## キンダーブックの フレイベル館